

清須と清洲

表題と写真は中日新聞 5 月 30 日「地名さんぽ」である。「清須と清洲」については、吉田一彦さんと共同で編集した『名古屋の観光力』風媒社、2013 年で思い出がある。名古屋の歴史を語るうえで、「きよす」はキーワードである。本のなかで何回も出てくる「きよす」をどちらにするか議論を重ねた。

吉田さんは歴史家として「清須」、私は近年の資料から「清洲」と主張した。議論した末に併記することにした。この記事を読んで、「古くから二つ使用」とあり、それも歴史的な言葉遣いであることを再確認した。参考になったので、記事から「地名さんぽ」していきたい。

「本能寺の変で亡くなった織田信長の後継者を話し合った有名な清須会議。全国的に有名な会議の舞台は清須市の清洲城とされる。この場所の地名には、今も昔も二つの字が使われている。江戸時代に旧街道美濃路の宿場町として栄えた「清須宿」。現在も格子窓の住宅が並ぶ細い通りを歩くと、数百メートルで赤や黒が目を引く清洲城が出現した。

「この辺りの住所が清須市清洲町」と教えてくれたのは地元の郷土史家加藤富久さん(71)。「清須」と「清洲」はどちらも「きよす」と読み、紛らわしく思えるが、住民の間では混乱はないという。

清須は 2005 年に旧 3 町が合併して誕生した新市の名。その 3 町の 1 つが清洲町で、いまでも学校など公共施設や住所の一部には清洲が使われている。街が名古屋に移る「清須越し」のまえ、城下町に 6,7 万人が暮らした江戸時代の初めまでは「須」、以降は「洲」が多かったというが、総じて両用されてきたらしい。どちらも「水」にちなむ字で、川があり低湿地の地理を表わしている。明治時代に清洲村ができ、町制が施行されて長い年月が過ぎた。清洲城や名鉄新清洲駅、JR 清洲駅と「洲」が定着してきたものの、平成の大合併で清須が再び公に登場した。」

清須と清洲、なにかと愛着があるので、これからも注目していきたい。

(2015年6月5日)

